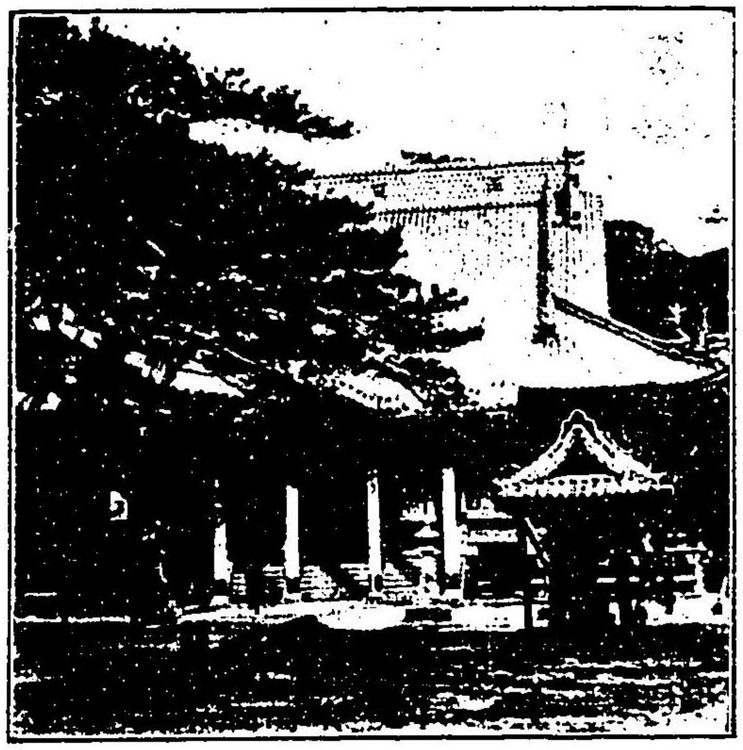
日蓮聖人安房靈跡

264
473

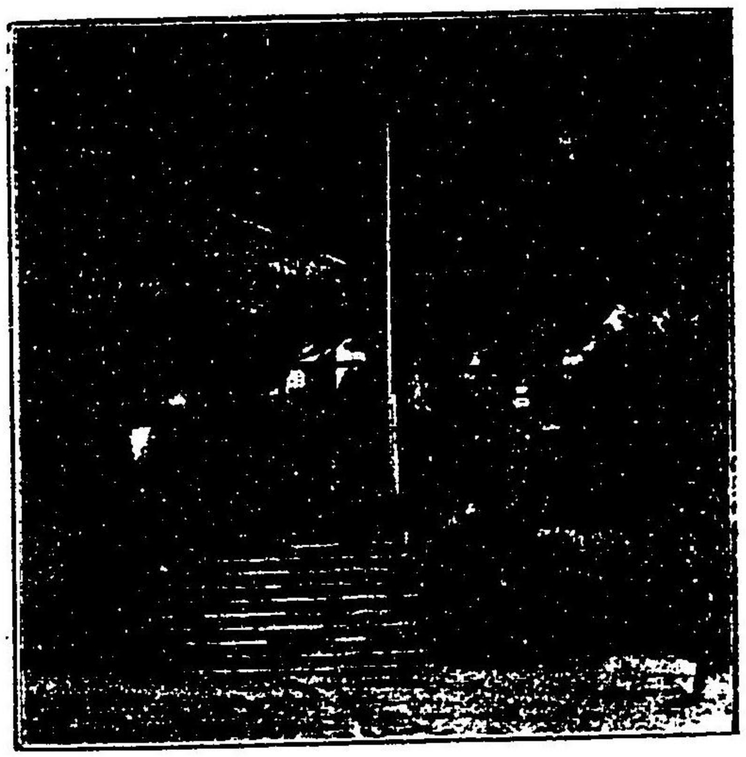
特30
351



誕生寺祖師堂

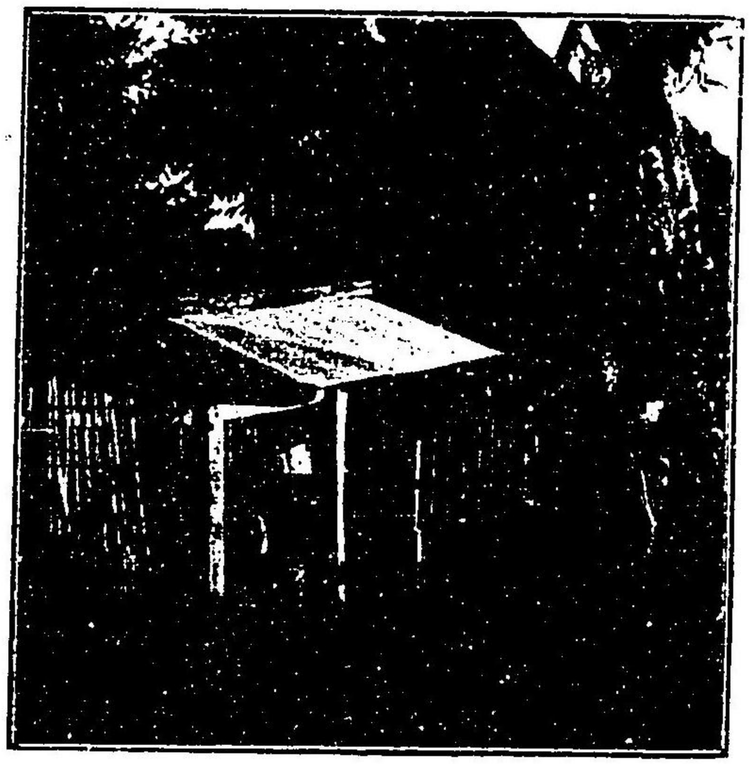
全上三門

妙蓮寺兩親閣



日澄寺

多　聞　寺



多聞寺班洗井

掛松寺

鏡忍寺●總門

鋭忍寺三尊之墓

長泉寺

緒言

夫れ我安房國たるや山聳へ海迫り風光の絶佳なる他に多く其比を見ず。加ふるに絶世の大聖日蓮上人を出せるを以つて其の靈跡頗る多し。玆を以つて古往今來詩人墨客の來りて其の詩腸を肥し、大聖日蓮上人を渴仰して其跡を來り訪ふもの四時絶ゆることなし。然るに其の景を賞し、其の跡を訪ふもの多くは小湊清澄小松原等の數ヶ所に止りて其他に及ぶ者稀なり。是れ全く好個なる指導案內者の無きに由らずんばあらず、其の賞すべきを賞せしめず其の訪ふべきを訪はしめざるは寔に遠來の客を遇するの道にあらず。且つそれ之れを訪ふものゝ志ならんや。余禿筆不文を省みず遠來の

明治
43.11.9
內交

客を過し、其の行を完うせしめんと欲して此の小冊子を刊にす、庶幾ば其の風光と其
靈跡とに背くなからん歟。

明治四十三年十月

編者　藤輪前厚謹誌

日蓮上人畧傳

佛使日蓮上人は今を距ること六百八十有餘年後堀河天皇の御宇貞應元年二月十六日安房國小湊の鄉に降生せらる、姓は貫名氏父は次郎重忠母を梅菊といふ鎌足公の後裔なり幼名を善日麻呂と云ふ資性穎悟年十二自ら乞うて州の清澄寺に入り師道善に就き研學す、十六歳薙髪して蓮長と號し彌々螢雪の功を積み精勵刻苦血を吐くに至る、念願すらく廣く天下に遍歴して道を求めんと、曆仁元年歳十七清澄寺を出で鎌倉に遊學すること五年去て比叡山に天台眞言を學び、前後十二年各宗の教義を修得し業成て故鄉に歸り建長五年四月二十八日の拂曉清澄山の頂にさし登る旭日に向て初めて新宗敎の建

設を宣言し次で盛に破邪顯正の法鼓を鳴らす而も大聲は里耳に入らず至る處舊教徒の憎惡迫害に遭遇し法席暖なるに遑らず、翌月上人は去て當時の首府鎌倉に法城を構へ宣教の傍ら立正安國論を作りて執權北條時頼に贈り内憂外患滅亡に瀕せる國勢を痛論し、上下に一大警告を與へ侃々諤々折伏逆化の鋭鋒を揮ふ、北條氏は上人を以て妖言世を惑すものとなし捕へて伊豆に流す居ること二年にして赦され故郷に歸る、小松原の難あり景信の要擊にあひ創を蒙る、時に蒙古來寇の事あり上人機に乘じ他宗徒と法の邪正を決せんとし屢幕府に迫る、幕府上人を龍口に斬らんとして果さず、更に佐渡に竄す上人立教の玄旨は多く此の在島の間に成る北條時宗蒙古來襲の豫言空しからざるを感じ上人を赦し莊田を寄せんとす上人受けず遯れて甲州身延山に入り專ら育英著

述に從事す、在山九年偶々微恙を得山を出て武藏池上に至り信徒宗仲氏の邸に入り示寂す、時に弘安五年十月十三日壽六十一。

津工藤吉隆の父行光宗祖を天津の眞言寺に請ず法孫日澄、寺主と法戰し之に勝て宗を改めしむ、今の天津山日澄寺是也(統紀十三)、上總興津の邑主佐久間重貞法華堂を建立し宗祖を請して受戒す其弟其子並に得度す小湊誕生寺興津妙覺寺の祖日家日保是也(統紀十一日家日保の傳には是の開堂と受戒とを文永元年に係けたり)

四十六歳、文永四年八月聖母梅菊卒す

四十九歳、文永七年房總の地疫癘復行はる、乃使を馳せて宗祖を請ず、會ま事有り赴く能はず像を造らしめ白布に經題を書し之を像の手に繫け沿海に其布を浸しむ蓋文永元年の例に同うするなり

五十三歳、三諫遂に容れられず文永十一年五月中央集權の地鎌倉を去て甲斐國身延に

入る爾後育英著述の傍ら山頂に登りて遙に父母の墳墓を拜瞻す

五十五歳、建治二年三月清澄寺道善逝く乃ち爲に報恩抄を撰し同年七月、日向等を遣はして墓前に展讀せしむ

六十一歳、弘安五年十月十三日武州池上宗仲氏の邸に入滅し給ふ、西暦千二百八十二年、明治四十三年より逆算して六百二十九年なり

日蓮上人安房靈跡年譜

御誕生、後堀河帝貞應元年二月十六日安房國小湊に於て降誕善日麿と號す佛滅後二千百七十一年西暦千二百二十二年に當る

十二歲、天福元年五月十二日安房國清澄寺の學室に投じ更めて藥王丸と名く

十六歲、嘉禎三年清澄に於て諸佛房道善に就き受戒薙髮し名を蓮長と呼ひ是生坊と號す

十七歲、暦仁元年鎌倉に遊學し諸宗の敎義を學ぶ

二十一歲、鎌倉より還り師親を省覲し清澄に於て戒體即身成佛義を著し再び出て諸國に遊ふ

三十二歲、建長五年春鄕に歸り父母に授戒す、四月廿八日清澄に於て立宗宣言邪徒蜂起して清澄を逐はる、翌五月鎌倉に入らんとして途州の南無谷より乘船す

三十五歲、康元元年鎌倉に於て工藤左近之亟吉隆聖化に浴し檀越となる

三十七歲、正嘉二年二月聖父貫名次郎重忠卒す

四十一歲、弘長二年正月十六日書を工藤吉隆に贈り四恩を報すべきを諭ゆ

四十三歲、文永元年八月鎌倉より鄕に歸る母公病む、十一月十一日東條小松原の難あり隨身鏡忍房日曉檀越工藤吉隆等之に殉じ宗祖亦た頭に疵を蒙る

四十四歲、文永二年、州の男金實信の孫民部祝髮して弟子となる日向上人是也、又天

津工藤吉隆の父行光宗祖を天津の眞言寺に請ず法孫日澄、寺主と法戰し之に勝て宗を改めしむ、今の天津山日澄寺是也(統紀十三)、上總興津の邑主佐久間重貞法華堂を建立し宗祖を請して受戒す其弟其子並に得度す小湊誕生寺興津妙覺寺の祖日家日保是也(統紀十一日家日保の傳には是の開堂と受戒とを文永元年に係けたり)

四十六歳、文永四年八月聖母梅菊卒す

四十九歳、文永七年房總の地疫癘復行はる、乃使を馳せて宗祖を請ず、會ま事有り赴く能はず像を造らしめ白布に經題を書し之を像の手に繫け沿海に其布を浸しむ蓋文永元年の例に同うするなり

五十三歳、三諫遂に容れられず文永十一年五月中央集權の地鎌倉を去て甲斐國身延に入る爾後育英著述の傍ら山頂に登りて遙に父母の墳墓を拜瞻す

五十五歳、建治二年三月清澄寺道善逝く乃ち爲に報恩抄を撰し同年七月、日向等を遣はして墓前に展讀せしむ

六十一歳、弘安五年十月十三日武州池上宗仲氏の邸に入滅し給ふ、西暦千二百八十二年、明治四十三年より逆算して六百二十九年なり

小湊山誕生寺

當山は高祖日蓮上人降誕の靈跡にして、又悲母蘇生の道場なり。文永元年正月高祖親ら草庵を結び給ひ、建治二年日家上人をして精舍を造らしめ給ひき。往昔は今の蓮華ヶ淵の側に在りしが、明應七年の大地震と、元祿の海嘯の爲めに土地陷沒して海となりしかば今の地に移りたるなり。國主里見氏德川水戸公等代々の御歸依篤かりしを以て七堂伽藍輪奐の美を盡し、本宗四十四箇本山中屈指の梵刹として其の名顯はる。末寺百六十有余を有し、當國唯一の靈場たり。靈寶には上人の御遺物少なからず、又代々學匠續出し古書畫等の珍什多し。毎年七月七日此等寶物の出拂を行へば參拜者は此

日御靈寶を拜視するを得べし。現董は僧正金塚日梵師なり。

妙日山妙蓮寺

該山は誕生寺の末寺にして、誕生寺を距ること僅に四丁餘、日蓮上人の御父貫名次郎重忠公即ち妙日尊儀の墓趾なり。公は人皇八十九代後深草天皇の御宇正嘉二年二月十四日生壽八十七歳にして逝去せられたり。當時鎌倉に在せし上人は悲報に接して取るものも取あえず御弟子日昭上人に後を托し、倉皇來りて其の喪を修め給ふ。大法の弘通に暇なけれど亡き父君を偲ばせ給ひて、御母妙蓮尊尼と共に墓畔に一廬を結ひ、一百日間喪に服し給へり。此の間讀經の傍一代大意抄等を撰して亡き父君の追善に備へ

給ひぬ。今の兩親閣は其の跡なり閣前に廣布梅と稱する古木ありしが今は枯れて其の根幹のみ兩親閣に存す。蘇生の櫻も今は第五次の幹となりて生育す。御靈寶には御眞筆蘇生の御本尊靈山契約の御本尊等あり。星野貞温師現主たり。

岩高山日蓮寺

妙蓮寺より六丁市ヶ坂を上れば、山腹に岩高山日蓮寺在り。舊志を案ずるに上人寶壽方に四十三、文永元年十一月小松原の法難に遭ひ給ふや、濱荻村の住人忠吾忠内の二人上人を警衛し送り奉る。然るに何所よりか來りけん、一人の翁の誘ふまゝに、上人之に隨ひ給ふに一の岩窟に到りぬ。老翁草を以つて宗祖に座をすゝむ。上人乃ち

之に坐し給ふに手負ひし御傷の痛遽かに去りたれば、不思議に覺して翁に向ひ、翁は抑も云何なる人に在するやと尋ね給ふ、翁は吾は是れ吉祥翁なりと答へて消へ失せたり。上人窟外に出で給ひて柳の枝を折り、以つて筆に代へ入口に首題を書し又其側に『此の岩窟は日蓮が住處なり』と記し給へり。爰に又一つの不思議あり、市之進と云へる者あり、一日此所を通りしに岩窟の中に人の聲せるを聞き、不思議に思ひて窃に窺ひ見るに、一人の僧の安祥として誦經せるあり。市之進驚き、何奈なる御僧にて在するやと問ふに、上人は御經を少時止め給ひ、吾は日蓮と云ふもの法華經弘通の爲めに人に惡まれ、斯く手傷まで負ひたれば暫らく此處に安らはんとするものなりと應へ給ふに之を聞きたる市之進は涙を流し、豫ねて聞き奉る日蓮上人にて在するか、此

の寒氣に傷まで負ひたまふ身の此の岩窟にて寒苦堪へ難かるべしとて大いに勞はり、急ぎ我が家に還りて母に此の由を告げぬ。母も大いに感激して御供養申さんとせしも、素より家貧しければ思ふに任せず、僅かに蓬の圍子を捧げんとす。市之進空き俵二箇を持ちて再び上人の所に至り、一枚は座に宛て一枚を入口に吊して風を防ぐ、老母は圍子を齎らし來り、上人に捧げ奉るに其の味苦かりしかば、上人は今より後此地の蓬に苦味なからしめんと宣ひぬ。之を聞ける老母は更に一つのねん願あり、此坂の下に些少許りの田地あれども、年々水無くして耕作すること能はず、上人法力を以て水を賜はらば吾等の喜びいかばかりならんと訴へければ、上人も之を諾ひ給ひ、一つの小石に妙法の五字を認め、老母に之を授け、田地の側に井を穿ちて其中に入るべしと宣ひしとぞ。今此の坂を市ヶ坂と云ふは市之進の家此の坂の下にありしが故なりと云ふ。又上人が入り給ひし岩窟の岩は創藥なりと云ひ傳へ、來り請ふもの少からず。境内に疵洗の井戸あり。

渡邊喜内の家

岩高山より六丁、昔は瀧口兵庫と云ひし家にして、歴世此の地の代官職たりしが、正德年間（今より二百年前）姓を渡邊と改む。曾ては佛前山の麓なる寄浦に住ひたりしが、明應の大地震後今の處に移りしなり。抑も此の家の寄浦に在りし頃、或日のこと、異樣の船一隻此浦に着せるを見るに、中に衣冠正しき高貴の人あり。由つて家に

請し、御介抱申し奉るに是なん貫名次郎重忠公なりき。されば上人御兩親の恩惠を受け給へる家なりと云ふべく、隨て上人も此に親近し給ひしなり。此家に藏する上人御眞筆の十界の本尊は建治元年八月十日、船頭小七郎へ授與すと認めらる。又上人の御母御所持の懷劍一口、貫名氏の緣家にして下總葛飾郡路野邊なる大野吉清山崎良衆より送りたる長持、及び其の由緒書、其他古書什器等頗ふる多し。若し本宗信徒にして之を拜觀せんと欲するものは往いて主人に請へ、快く諾さるべし。

天津町神明宮

上人自ら錄外御書に曰く『安房國東條の鄕丸の御厨天津大神宮の御社に祈願し、日蓮閻浮提の內日本國安房國東條の鄕に此の正法を弘通したり』と此の社小湊山より廿五丁、清澄山より一里餘の路程あり。上人清澄山に在學中嚴寒の候風雪を冒して一百日間日參せられたりし社なり。當時社主は上人に御供養申しければ願滿の日御本尊を認めて其志に酬ひ給はんとせり。然るに前日來の大雨にて河水汎濫して渡ると能はず、乃ち橋の袂に住へる老婆に托して去られたりと云ふ。後これを川向の本尊と稱して今に傳ふ。二尺餘の木綿に首題を認め、其の兩邊に不動愛染を書し、署名して日蓮と書判まで添へらる。此の外曆の御書大黑天の畫像等ありたりと傳ふるも今は有らず。

天津町日澄寺

神明宮を距ること僅に八丁にして日澄寺に至る。當山は弘安五年壬午十月十三日の創立也。上人を開基とし二世を日玉上人とす。小湊山の末寺なり。日玉上人俗稱を工藤左近丞吉隆と云ひ、文永元年上人東條の難に逢ひ給ふや、北浦忠吾忠内の二人と共に上人を護り奉らんと欲し、東條左衛門景信と闘ふて衆寡敵せず、遂に戰沒す。されば上人其功を追賞して御弟子となし、諡號を妙隆院日玉上人と賜ひぬ。其の居宅を以て寺とす日澄寺之れなり。吉隆出馬に臨み夫人操適懐胎臨月なりしかば遺言して曰く吾三十餘才まで一子無きを憂ひしが、上人に請ひ、此に一子を得たり。未だ其の子を見ざるに吾は法難に殉じて命將に終らんとす。汝分娩の後若し男子ならば養育して上人に奉り、御弟子となして吾が菩提を弔はすべしと。其の子男子なりしかば上人に奉りて

弟子となす。日隆上人是也。當山第三祖たり。明治廿五年一月本堂庫裡共に火災に罹りて全燒せしが、幾時もなく庫裡を再築し、三十七年住職池田良省師並に四宮喜三郎氏等檀信徒の丹誠に依り、本堂の再建を見るに至れり。今は小湊山末寺中屈指の大刹となれり。

當寺に安置せる上人の木像は、弘長六年上人伊豆謫居の際御母妙蓮尊尼偶病に伏し玉ふと聞き給ひ、今は天下の罪人となりて東西山河を距つる身の生前の給仕も得叶はず。せめては影像なりとも送りて御母君を慰めまつらんと覺し、自ら木像を彫刻して之を海に投し、安房國なる母の許に至るべしと念し給ひしに、果して天津浦工藤の邸前なる海岸に着せり。工藤公是を奉持して小湊に至り、妙蓮尊尼に捧げ奉りしもの即ち是

れなり。後我が家に勸請して、之を開運の祖師と稱す。靈驗今に新なり。又釋尊の木像は雲慶の作に係り、四宮喜三郎氏の家寶なりしが、元祿年中當山に納めたるものなりと云ふ。其の他七面天女の像も同家より納めたるもの當寺の什寶たり。惜らくは火災の際重要なる什寶の燒失せるもの少なからざりしを。

清澄山旭森

天津町より一里十五丁清澄山の頂に在り。是れ上人御年三十二歳の春建長五年四月廿八日の佳辰を以て法華經弘通を宣言すべく此の日未明安祥として法華三昧より起つて此森に到り給ひ旭日の東天に登るを拜して御聲朗かに始て御題目を唱へ給ひし所なり。所謂宗旨建立發軫の道場なり。今より二百有餘年前、日滿上人宗祖の石像を建てゝ其の靈跡を紀念し、明治の初年吉川日鑑上人發願して祖師堂を建立し、內陣の佛具莊嚴等は前身延山主豐永日良上人の喜捨に係るもの多し。此の地海拔三百米突、眼界開豁にして、東は海灣遠く開け、氣宇宏大にして上人が高遠雄大なる抱負を宣言すべく特に此地をトし給へる寔に其の所と謂ふべし。

千光山清澄寺

旭森より更に登ること數丁にして千光山清澄寺に至る。寺は人皇四十九代光仁帝寶龜二亥辛年不思議法師の創設に係る慈覺大師を中興の祖とし今は眞言宗に屬す。本尊

虛空藏菩薩は開山不思議法師の彫刻せるものなりしが嘉保三年（開山已來三百餘年後）電火の災に罹り本尊堂宇悉く烏有に歸したり。其後伽藍の新築と共に再び本尊を彫刻して安置せしもの、爾來八百餘年を經て今日に至りたれば、堂塔の古雅なると珍器什寶古書畫の夥多なるは關東隨一と稱せらる。宮に本化大聖が垂迹得道の聖蹟として紀すべきのみならず夙に關東有數の古刹として名あり。

時は後堀河天皇天福元年上人御歳十二歳、此山に登り道善坊を師として眞言を學び、十六歳出家得道の儀相を調へ研學益々怠りなく虛空藏菩薩に祈誓を凝して專ら滅學を念ず適滿行の朝舜貴なる老僧の來りて明星の如き玉を與ふるあり、上人之れを受けて左の袂に納め玉ひしと云ふ。蓋し虛空藏菩薩の靈驗なり。堂の側に明星ヶ池あり上人加行の時鹽漱せられし所なり。又凡血の笹と稱するあり、是亦宗祖が所願成就の曉凡夫の惡血を吐いて聖者の列に入り給ひし處なりと傳ふ。其の師道善坊の墓亦此地に在り。

宗祖年十七歳鎌倉京都奈良等に遊學して諸宗の奥義內外の學を極め御歳三十二歳御歸山あり、時に建長五年なり。四月廿八日未明より起つて旭日の東天に登を拜し題目十偏初て妙宗の建立を宣し、此日淸澄寺に大衆を會して法輪を轉し給ふ地頭景信の怨疾實に此時に始まる。

地は淸澄の山嶺に位し海拔三百餘米突境內廣漠老松古杉鬱然たる處丁々として天を突く一大老杉あり、是れ宗祖當年の古杉にして周繞數十尺、天下稀有の巨木と稱す。地

に鮮苔滑にして萬古の色を示す。

洵に神寂の氣幽邃の韻脉々として人の心魂を洗ひ怪禽の聲梵唄の音嫋々として人の俗腸を清む。若夫れ天颪颯として袂を拂ひ三伏の夏猶秋冷を覺ゆる時、眼界を放つて四方を眺めば淼々たる大洋は前面脚下に迫り蜒々たる關東の山野背後一眸の中に集むべし。風光の明眉眺望の絶佳、行人をして自ら豪壯の氣の胸中に磅礴たらしむるものあり。誰か是れ末法の救主聖日蓮が出家得道初轉法輪の化儀を整へ玉ひし靈域たるを知らざらんや

濱荻多聞寺

天津町より十三丁寺は山の中腹に位す。後へに連山起伏し前に大洋漫々として瀛ふ。風光明媚の地坐して漁舟の往來を眺め、伏して松籟の奏樂を聞くべし。往古は眞言宗なりしが後轉じて小湊山誕生寺の末寺となれり。開基は中老僧日祐上人なり。毘沙門天を安置す。是れ根本大師傳敎の眞作にして靈驗甚だ顯著なり。其昔建長七年八月の頃、吾祖の小湊を出て、花房淨圓坊に赴き給はんとするや、會々黄昏に及ぶ。時に一人の童子後より追躡し來る。上人之を見て誰何し給へば童子答へて曰く、我は濱荻なる毘沙門天なり、曾て靈山に於て法華經の行者を守護すべきを誓ひたれば、常に上人に隨從し晝夜に守護し奉る。今宵偶々夜陰前路尙遠し、されど進ませ給へ必ず供奉し奉るべしと云ひ訖りて何處ともなく消え失せぬ。宗祖は不思議におぼしつゝ道をたどり

給ふに果せるかな、人ありて供養し奉らんとす是れ多聞寺の僧と北浦忠吾忠内の二人なりき。皆毘沙門天の告げによりて迎へ奉るなりと云ふ。乃ち之れが供養を受け、深く其志を嘉みして本化の大法を授け給ふ。彼等之を聞いて大に歡喜し寺僧は其宗を捨てゝ弟子となり本門の大戒を受け、忠吾忠内の二人亦正信に歸したりと稱す。其他海中出現の釋尊を安置し、又船守彌三郎が感得せし内胎入の祖師像あり。境内を去る少許にして疵洗の井戸及び御腰掛石等あり。藤輪前厚現に主たり。

東條村掛松寺

當寺は小松原山鏡忍寺の末寺にして濱荻を去る大凡十二丁。舊志を案するに高祖實

算四十三、即ち文永元年十一月小松原法難の砌弟子鏡忍坊及信士工藤吉隆之に殉じ、上人は北浦忠吾忠内の二人に擁せられて難を免れ給ふ。然るに眉間に負ひ給ひし御傷より鮮血淋漓として見るも痛はしき御姿なりしが、此處に到り小やかなる流あるを見て忠吾忠内御傷所を洗ひ奉る。此時側なる松の枝に御袈裟を掛け給ひ少時休らひ給ふ。是を袈裟掛の松と云ひ、後に一宇を建立して袈裟山文永寺と稱せしが元祿元年海嘯の爲めに堂宇悉く洗ひ去られ、五年之を再興せしが、八年大風の爲めに破碎され、享保十八年善行院日定三度之を建立し、且つ元文四年宗祖の銅像を鑄造し松下に奉安して今に傳ふ、て古色蒼然坐に崇敬の念を生せしむ蓋し宗祖銅像の嚆矢ならん。明治卅六年又大風雨の爲め破壞されしが、現住常岡智光師其の無檀少祿なるにも係らず、東奔西走

幾多の辛酸を嘗めて之を經營し、今や聖蹟として耻ぢざるに至れり。

小松原山鏡忍寺

袈裟山掛松寺より大凡七丁、鴨川町より十余丁にして古松老杉鬱然たる處儼然たる伽藍あり。唱題法鼓の響き常に絶えず。是れを小松原山鏡忍寺となす。所謂小松原法難の聖蹟として夙に宗徒の熟知する所、苟も上人一代の悲壯史を語るもの、先づ開口する所なり。文永元年、上人花房の青蓮坊に在りて地獄抄を著述し給ふ。偶天津の城主工藤吉隆使を遣はして四恩抄の講を聽かんことを請ふ。上人乃ち喜びて諾ひ玉ひ使者と共に赴き給ふ。恰も建長五年四月以來好き機會もがなと待ち構へし東條左衛門景

信、早くも之を聞き知り、時こそ來たれ日頃の恨み彌陀の怨敵目に物見せんと數百の部下を森に伏せしめ今や遅しと待ち受けたり。つゆ知り給はぬ上人は二三の御弟子と共に松原にかゝり給ふ。景信部下を指揮し自ら進んで一擊の下に上人を斃さんとす。鏡忍坊を始め御弟子等死力を盡して上人を擁護し奉り鏡忍坊遂に敵仍に斃る。工藤吉隆變を聞き北浦忠吾忠内等と共に馳せ來りて急を救ひ奉らんとし遂に衆寡敵せずして吉隆亦斃れたり。上人亦眉間に傷を負ひ給ひしが忠吾忠内等に擁せられて難を免れ給ふ。是れを小松原法難と稱し聖祖四ヶ度大難の一なり。

鏡忍坊日曉上人及工藤吉隆の墓あり。境内廣漠巨樹老杉蔚然として枝を交へ、春は櫻桃妍を競ひ秋は楓葉錦を飾る。祖師堂の側に上人御手植の松有りしが、明治三十五年

大風の爲めに倒れたるは惜むべし。今尚其の根株を存せり。

靈寶には太刀受念珠、鏡忍房血袈裟、東條左衞門景信折太刀、鏡忍房授與の本尊等あり。

四月八日開山會、七月十六日靈寶風入、十二月十一十二兩日會式等主なる年中行事なり。常問諦道師現主たり。

東條大道接天津。日暮松原欲人襲。
白刃如霜矢如雨。寧知刀杖不加身。

（太田覃）

大竹新四郎の家

東條村字上人塚に在り。上人小松原御法難の際御供養し奉りたる家なり。當時奉りし米の殘りを祕藏して後代に傳へしが、初めは一升餘もありたれど、その後御符として施與したるを以つて、今は僅かに一勺を殘すのみ。其色黃にして虫害なく、宛から昔を偲ぶべし。由緒書は今保田の妙本寺にありと云ふ。

妙祐山長泉寺

東條村和泉に在り。小松原山の後方六丁餘を距つ。長泉寺の檀家にして六老僧日向

上人の生家あり佐久間藤九郎と云ふ。佐久間氏もと、藤原氏なりしが寛永の頃今の姓に改めしなりと云ふ。上人の御父重忠公の姻戚にして日向上人の祖父は小林民部實信と云ひ、其子男金藤三郎は即ち日向上人の父君なり。男金村に住せるを以つて氏とせり元久の亂に民部實信京都に在りしが、時の守護職武藏守朝雅が無禮を惡み、伊勢平氏と與みして共に從はず、又實名次郎重忠公と共に北條時政が非政を惡みしかば罪に座して上總茂原に遷さる。後故ありて伊豆北條に逃れ匿れ、建保三年正月其地に卒す。其子實長上人の御父重忠公と姻戚の故を以て安房國に來り住す。建長五年二月十六日一子を擧げ祖父の名を襲ひて民部と稱せしむ。後出家して上人の弟子となる。民部阿闍梨日向上人即ち是也。上人身延退隱の後も親しく講席に侍して之れを筆錄す。御講聞書是れ也日向記と稱して今世に行はるゝもの興師筆受の御義口傳と共に上人の親撰に准せらる。正和三年九月三日遷化せられ遺骸を男金の東麓に埋めたり。現蓮は川津快龍師なり。

西條村花房疵洗井戸

小松原より十六丁にして疵洗井戸あり。或は曰く上人御年三十二歳建長五年四月廿八日持佛堂の南面に在つて法筵を張り給ふ。久しく京都鎌倉に遊學して新たに歸れる蓮長師の說法や如何にと東條の地頭景信を首め遠近傳へ〳〵て來り會すること雲の如し。纔て開宣せられたる四個の格言、念佛は無間の業、眞言は亡國、禪は天魔、律宗

は國賊なりと叫び給ふに師の道善御房は蓮長狂せしかと訝り一會の大衆事の意外なるに惑耳驚心して呆然たり。中に地頭景信は己が信ずる彌陀を誹られたればとて烈火の如く怒り、無作法にも高座の上より上人を引き下ろし一刀の下に斃さんとせしも道善坊に慫められて其場は事なきを得たり。されど憤怒一たび極度に達せる景信の心は解くべくもあらず、好き折あらばと思ひ定めたり是れぞ後年小松原法難の來るべき因由なりき。斯くて上人は清澄寺に留まること能はず、長狹郡西條なる花房の郷青蓮房に住み給ひき。適々西條の地頭亦熱心なる念佛の信者なりしかば、陽に阿彌陀堂供養の導師として請待し、陰に私かに機を見て殺害し奉らんと謀れり。上人は其の心事を知ろしめせども知らざる爲(それ)して其請を諾ひ給ひ、扨て之れに趣いて暢へ給ふには、此土無緣の彌陀に歸依して有緣の釋尊に背きなば縱ひ如何なる佛事を爲すとも阿鼻大城に墮ちんこと疑あるべからずと、憚る所なく述べ給ふ。之を聞ける參堂の僧憤怒嘗膽に徹し、之を殺害せんとせしかども果さず。上人は御堂の椽より馬に召されて宿所に歸り給へりとぞ。今此の地に疵洗の井戸と稱するもの恐らくは此の時多少の手傷を負ひて此處に洗ひ給ひしものなるべし。今は蓮行寺の所轄に屬せり。

三原正文寺

人皇百七代正親町院の御宇國主里見義弘此地を領せり。當時三原郷小川の住人正本左近太夫平頼忠入道して環齋と云ひしが、其父勝浦の城主時忠が菩提の爲めに建てし

もの即ち今の正文寺なり。其の昔安元治承の頃相模の三浦が黨眞田某が領せし時、一族の菩提所として建てたる禪宗の一宇なり（今に其の墳塋あり）しが、正木氏飛華落葉の無常を悟り、遁世入道して環齊と稱し、禪宗を改めて本宗に歸依し、時の小湊山貫首第十三代日威上人を請して開基導師となし、且つ堂宇を建立し修繕を加へて父時忠の法號威武院正文日出大居士に因みて正文寺と稱し小湊山末寺となる。時に永祿二年なりき。現董は座間貞善師なり。

加茂日運寺

當寺は貞觀年中の建立に係り眞言宗なりしが上人文永年中鎌倉へ趣き給ふ途次一泊し給ひ、時の住僧勝榮坊、上人の說法に服し捨邪歸正し其の名を改めて日運と號し、上人の弟子となる。是れ吾宗に於ける改宗者の發端なりと云ふ。古來十王堂と稱する堂ありしが元龜年中正木重郎なる者心願に依りて之を再建し、勝榮山日運寺と改む。重郎の弟環齊の時に至り、時の大守里見義頼の歸依を得て、黑印十三石を拜領し、小湊山の末頭に班せりと云ふ。現住は伊菅日應師なり。

南無谷妙福寺

建長五年四月廿八日上人清澄山上に宗旨建立の大儀を擧げ給ひ、末世救護大法を提げて先づ當時政治上の中心たる鎌倉に宣傳せんと欲し、南無谷に到りて便船を待ち給

ふ。偶海上風荒く、浪高くして船を出すこと能はす。乃ち上人は海岸に聳えし山の頂きに登りて日天子を拜し、吾が心願成就して妙法普く天下に弘まるならば海上速に波靜まり順風を得させ給へと祈り給ふに、不思議なる哉暴風頓に鎭まり順風を得て鎌倉に着き給ふ。後文永元年上人來房せらるゝや、泉澤權頭が家に滯在して教益を施し給ひ、且つ此家の老母に法名を授けて妙福と賜ひぬ。是即ち本宗に於て女人の法名に妙の字を冠する藍觴なり。次いで弘安二年權頭身延に詣で上人が妙法弘通の大化成就を祝し奉りしに、上人の御喜び殊に深く、御弟子日法上人を召して告げ給ふに、日蓮曩に泉澤氏に寓するや、氏が老母吾が爲めに衣服の洗濯などして只管まめやかに仕へたりしが、當時日蓮裸體にして讀經せしことありき。今にして昔を偲ぶに懐舊の情轉た深し。老母の志を紀す爲め、裸形の木像を泉澤氏に贈らんとす。汝一刀を振へと。日法上人乃ち命に應じて彫刻し、以つて泉澤氏に贈る。氏後に一宇を創し成就山妙福寺と號し、松本坊日念上人を開基とし、弘安二年上人の允許を得て開堂供養を修せりと云ふ。靈寶には上人裸形の御木像の外、御眞書の御首題一幅、及び泉澤氏身延登山の節授與せられたる鬼子母神像、日朗上人の御眞書、上人御滯在中に使用せられたる茶釜等あり現住は山本學隆氏なり。

因に講談師柴田南窓の墓も當山にあり。

日蓮上人安房靈跡 終

妙教頌歌

抑も佛教といふものは
中天ぢくのまかだ國
悉達太子といはれたる
世のはかなきを悟とられて
衆生の迷ひを覺さんと
十九のみとしに出家して
世界に一ッと呼はれたる

三千餘年の其昔し
淨飯王の太子にて
太子のおん身に在りながら
三毒五欲に苦しめる
王位を捨てゝ唯一人
佛の道を修めんと
鷲の御山へわけ登り

阿私仙人に隨ひて
薪きや木のみくさのみを
艱難辛苦の行をつみ
八十歳に入滅を
其の年月に説かれたる
今其次第を分け見れは
華嚴といへる經にして
阿含經をは十二年
合せて四十と二年なり

奴僕となりて水をくみ
採りて所須をは供給し
三十歳に成道し
せらるゝ迄の五十年
經こそ即ち一切經
始めて説かれし經文は
僅か二十と一日間
方等般若が三十年
後ち法花經を八ヶ年

入滅以前に一晝夜
是か即ち一代の
斯くも多くの經々を
最後に説かれし法華經の
無量義經の文中に
種々なる法を説きたるも
四十餘年の經々は
又法花經の一の卷
之れより正しく方便を

説かれし經か涅槃經
五十年の説教そ
何故説きしと尋ぬれは
序文に當れる經文の
衆生の性欲不同故
方便力を以てなり
未た眞實顯はさず
方便品の經文に
捨てゝ無上の法を説くと

斯く明かに經文に
安房の國は長狹なる
一切經を讀まれたる
一切衆生か即身に
此の法花經に限れりと
建長五年癸丑なる
清澄山のいただきに
南無妙法蓮華經と
之れ開宗の始なれ

說かれてあるを見出せしは
清澄寺の經藏に
日蓮大士の大活眼
成佛なすへき佛法は
大悟せられし曉は
四月の二十八日に
朝日に向ひて題目を
唱へられし旦こそ
夫れより邪法を折伏の

四個格言を立られし
日蓮宗そと名乘身は
又聖人の御志をつぎ
本宗信徒の義を守り
他宗他門の如くなる
世界の森羅萬象を
妙法五字にてあるなれは
得たるも即ち此法そ
妙法五字の本尊の

無二亦無三の法なれは
法花經一部の要を聞き
まづ第一に各々か
妙法五字の本尊は
佛の像や名にあらす
集めて漏さぬ其ものか
一切諸佛か佛身を
爰をよく〳〵鑑みて
餘に信すへきものなしと

唯一心に信しつゝ
寂光淨土は此處にあり
一天四海を法王の
皆一同に妙法の
如說修行を奬むへし

自ら作佛を知る時は
人をも爰に導きて
家人となして萬民か
五字を信する夫れ迄は
如說修行を奬むへし

因みに妙敎頌歌一篇本宗信徒安房國鴨川町吉澤吉右衞門氏の寄贈に係る氏は明治三十一年發願して居宅前に一家を新築し本宗信徒一千名を限り無料宿泊を許せり今玆適滿願を機とし紀念として頌歌一篇を寄せらる近來稀有の美擧と謂ふべし。

天津鴨川保田間乘合馬車

▲上人塚 ▲鴨川 ▲坂東 ▲小町 ▲花輪
▲金束 ▲山中 ▲市井原 ▲保田

天津發 午前四時半 午后一時
保田發 午前五時半 午后一時

天津馬車

煙草
荒物
小間物
學校用品
化粧品
唐物
賣藥

日蓮上人萬病丸
安房靈跡賣捌所
一州房手賣捌處

天津町學校前
長狹屋

安房靈跡
日蓮上人賣捌所

房州小湊
鈴木屋洋物廛

普通教育理化學器械標本模形体育運動用具椅子
帽子洋服附屬品沓下メリヤス文房具化粧品各種
安房名所繪葉書各種小湊大觀其他日用雜貨品類

寫眞

安房天津町濱町

北村寫眞館

繪はがき發行

杉木寫眞店

安房鴨川町

安房郡東條村
龜田病院
院長
龜田俊正
內外科產科
婦人科
入院隨意

日蓮宗信徒御旅館
鴨川町
吉田屋

日蓮宗信徒御旅館

鴨川町

相模屋

八

時計自轉車業

鴨川町

齋藤本店

北條町

北條支店

九

日蓮宗信徒御定宿
海水浴御旅館
小湊
清海屋

日蓮宗信徒御定宿
海水浴御旅館
小湊
山口屋

房州小湊
江見屋號
山田菊松

穀物荒物小間物類

東京灣滊船乘客貨物天津取扱所
東京鴨川間每日一回往復定期航海
四宮回漕店

日蓮宗信徒御定宿

天津町引土

油屋

日蓮宗信徒御旅館

天津町

蓬萊屋

日蓮宗信徒御定宿

天津町

井筒屋

日蓮宗信徒御定宿

安房天津町天王下

中屋

御すし

天津町濱荻
濱壽司

安房東條村上人塚
東條亭

日蓮宗信徒御定宿

明治四十三年十月三十一日印刷
明治四十三年十一月十日發行

編輯兼發行者　千葉縣安房郡天津町濱荻多聞寺住職　藤輪前厚

印刷者　東京市京橋區南紺屋町二十四番地　岡田錬一

印刷所　東京市京橋區南紺屋町二十四番地　八洲舍
電話新橋二五七八番

（定價金八錢）

264
473

020045-000-5

特30-351

日蓮聖人安房霊跡

藤輪　前厚／編

M43.11

ABH-0240